



Title	『異邦人』における「時の経過」について：現在時に生きるムルソーをめぐって
Author(s)	安藤, 麻貴
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 219-228
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8675
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『異邦人』における「時の経過」について —— 現在時に生きるムルソーをめぐって ——

安藤 麻貴

アルベール・カミュの小説『異邦人』(1942年)¹⁾は、全六章からなる第一部と、全五章からなる第二部とで構成され、両者はほぼ同じ長さでいわば対のような様相を呈している。しかしながら、第一部と第二部とでは、「時の経過」の表象に大きな相違がある。第一部では主人公ムルソーが母親の死の知らせを受け取ってから、浜辺でアラブ人を殺害するに至るまでの18日間の出来事が日記風に語られる。それに対して、第二部では牢獄での生活、裁判、死刑判決、司祭に対する反抗など、およそ一年にわたる事柄が回想記風に語られる。

この小説の読者にとって、最も鮮烈に映るのは、独特の無関心によって、過去にも未来にも目を向けず、純粹に現在時に生きるムルソーの姿であろう。一人称で語る彼は、自らの過去についても寡黙で、結婚や職場での出世にも興味を示さない。社会的規範を意に介さず、身体的悦びを享受することには貪欲な自然人であるムルソーにおいて、時の経過とは、瞬間瞬間の積み重なり、現在時の継起にほかならない。主に第一部で描かれるそのような人物像が、どのような文学的技巧、描写によって成り立っているのか、本論ではまず、確認の意味を込めて考察したい。その上で、第二部での回想記風の語りへの変化には、ムルソーのどのような時間観念の変化があったのかを探り、この小説の「時の経過」をめぐり大きな謎である、語り手はいつ語っているのか、という問題についても触れておきたい。

I. 現在時に生きるムルソー

1) 「きょう」

この小説は、「きょう」の一語によって幕を開ける。

きょう、ママンが死んだ。もしかすると昨日かもしれないが、わからない。養老院から電報を受け取った：「ハハウエシス、アスマイソウ、オクヤミシマス」。これでは何もわからない。多分昨日だったのだろう。(p.141)

1) 本稿では、ブレイヤッド版を使用し、各引用後の括弧内に頁数を記す。下線による強調は全て論者による。Albert Camus, *L'Étranger in Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2006 (以下、CEC, Iと略記), pp.139-213. 翻訳にあたって、新潮文庫版窪田啓作訳(2004年、114刷)、及び新潮社版『カミュ全集』第二巻(1972年)所収の中村光夫訳を参照させていただいた。なお、本稿で引用するカミュの他の作品についても『カミュ全集』全十巻(新潮社、1972-73年)を参照したことを記しておく。

「きょう」は、客観的に特定することができない時の指標、言い換えれば、語り手にとってのみ明らかな時の指標である。そのため、読者は、語り手の「いまここ」を解明する手掛かりもなく、直ちに語り手の世界に取り込まれる。しかも、「きょう」とは、「現在」に差し迫った時間であり、語り手が即座に出来事を報告しているという印象を与えるのである。実は、章の区切りは必ずしも一日には対応していないのだが、引き続き、第二章と第三章の冒頭部にも、「きょう」という語が現れ、語り手と出来事の同時性が強調される。なかでも、読者を、発話と出来事の現在へと直ちに引き寄せる、小説冒頭の「きょう」の一語の重みは大きい。

ところで、上に引用した冒頭部に、「きょう」「昨日」「明日」という三つの副詞が揃っていることは、第一部で描かれる平凡なサラリーマンとしてのムルソーの生活の流れと照らし合わせると興味深い。彼の生活は、カミュが『異邦人』と同年に刊行した哲学的エッセー『シーシュポスの神話』で述べる次の一節を想起させるものである。「起床、トラム、職場や工場での4時間、食事、トラム、4時間の仕事、食事、睡眠、そうして同じリズムで流れていく月火水木金土 [...]」(pp.227-228)。ムルソーはこの生活に対して不満を抱いているわけではない。むしろ、この生活が崩れる可能性のあることは忌避する。フランソワーズ・バゴが指摘するように、「将来に対する企図や思い出を検閲することにより、彼[ムルソー]は、今この瞬間が遠ざかるあらゆる可能性を[...]くい止める。束縛として課される社会的慣習や時間割は、[...]そのための心地よい防御策としても機能するのである²⁾」。ムルソーは実際、「僕は、今から起こりそうなこと、つまりきょうや明日のことにいつも心を奪われていた」(p.200)と語る。一週間のリズムの反復の中で、ムルソーにとって大切なのは、ただ目の前にあることであり、今この瞬間を享受することである。物語の幕開けとなる「きょう」という言葉は、語り手にとっての現在という時間の優位を端的に示しているのである。

2) 複合過去形の文体

現在時に生きるムルソーの意識は、この小説特有の、因果関係を欠いて並列された複合過去形の文体と密接に結びついている。カミュは、伝統的に小説の時制として用いられてきた単純過去形の代わりに、口語で用いられる複合過去形を物語の主要な時制として採用した。その結果、テキストに、語り手が直接、真実味を帯びて語りかけてくるような効果もたらされている。さらに私たちの関心を引くのは、単純過去形のように物事の脈絡や継起を述べるのに適してはいない、この時制の特性である。ジャン＝ポール・サルトルは、論文『『異邦人』解説』(1943年)の中で、この小説における文体の特徴を、アメリカ小説の影響を指摘した上で、次のように分析する。

[...]それぞれの章句 (phrase) が現在である。[...] 章句はくっきりとして、つ

2) Françoise Bagot, *Albert Camus L'Étranger*, P.U.F., «Études littéraires», 1993, p.70.

ぎあとがなく、それ自体で完結している。[...]一つの章句と次の章句との間で、世界は無に帰し、再び生まれる。言葉は、それが築かれるや、虚無からの創造だ。『異邦人』の章句は一つの島である。我々は、章句から章句へ、虚無から虚無へと、滝となって落ちる。カミュ氏が複合過去形でこの物語を作ることを選んだのは、各章句単位の孤立を強調するためである³⁾。

サルトルは、複合過去形の文体に、死を明晰に見つめて、未来はなく、人生が「現在の継起⁴⁾」となる不条理の人間の時間意識の反映を見ている。カミュは実際、不条理に関する哲学的考察である『シーシュポスの神話』の中で、「たえず意識の目覚めた魂の前にある現在時、そして現在の継起、これこそ不条理な人間の理想である⁵⁾」と説いている。短く、とぎれとぎれで、相互に因果関係をもたない複合過去形の文体が、ムルソーにおける「現在の継起」としての「時の経過」をきわめて巧妙に反映していることは確かであると言えよう。

「島」のように孤立する、この小説の複合過去形の文章は、サルトルも着目するように⁶⁾、「そこで *alors*」、「そのとき *à ce moment*」、「そのあとで *ensuite*」、「すぐ後で *peu après*」、「少し経って *un peu plus tard*」、「それから *puis*」といった時の副詞(句)によって頻繁につながれる。第一部において、ムルソーは、物事をそれが起こる順序に従って、無関心に(無差異に、*in-différence*)、同等の重みを持って記述する。ちょうど、彼が日曜日にバルコニーから通りを眺め、通行人が現れるごとに詳細に描写する場面が示しているように(第一部第二章参照)。しかし、第二部の予審や裁判でムルソーは、殺害に至るまでのほとんど偶発的に起こった事柄に関して理由を求められ、検事が行ったように、首尾一貫した「事件の経緯 *le fil d'événements*」(p.199)を説明するよう求められる。たとえば、なぜ銃で撃った際、一発目と二発目に間を置いたのか、なぜ銃を携えて、アラブ人のいる泉の方に戻っていったのか、といった具合である。だが、もともと、そうした因果関係とは無縁の世界の中で生きてきたムルソーに、殺害の「動機」(p.201)や「予謀」(p.198及びp.203参照)を求めようとしても無駄である。ムルソーは、答えに窮した挙げ句、「太陽のせい」(p.201)と語るが、これほど非論理的な答えが法廷で受け入れられるはずもなく、彼は死刑を命ぜられる。司祭に悔悛を勧められるも、キリスト教的な来世を断固として拒否するムルソーは、カミュが「不条理の英雄」とみなす、山の上から転がり落ちる岩を際限なく運び上げるシーシュポスの描写を想起させる。

人間が自分の生へと振り向くこの微妙な瞬間に、シーシュポスは、彼の岩の

3) Jean-Paul Sartre, «Explication de *L'Étranger*» in *Situations I*, Gallimard, 1947, p.117. 強調は論者による。翻訳にあたって、窪田啓作訳「『異邦人』解説」(ジャン＝ポール・サルトル『サルトル全集』第十巻、人文書院、1953年)を参照した。

4) *Id.*

5) Albert Camus, *Le Mythe de Sisyphe*, in *CEC*, I, p.262. 強調は論者による。

6) Voir Jean-Paul Sartre, *op.cit.*, pp.118-119.

方に戻りながら、あの相互につながりのない一連の行動が、彼自身の運命となるのを、彼自身によって創りだされ、彼の記憶のまなざしのもとに一つに結び付き、やがては彼の死によって封印されるであろう運命と変わるのを凝視しているのだ⁷⁾。

「あの相互につながりのない一連の行動 *cette suite d'actions sans lien*」は、先に指摘した複合過去形の文体に反映される、ムルソーの行動の偶然性と呼応している⁸⁾。ムルソーもまた死を前に、シーシュポスと同じく、そうした行動を積み重ねてきた自らの運命を引き受け、凝視していると考えられるだろう。両者はともに、「幸福」を感じるのである⁹⁾。

3) 身体感覚の優位

ところで、過去や未来に関心を向けず、現在のみが全てであるムルソーという人物像を支えるのは、身体感覚に関する記述である。彼は、その無関心な態度に反して、身体的喜びを享受することにかけては自発的であり、貪欲である¹⁰⁾。母親の棺を前に、カフェオーレを飲み、煙草を吸い、埋葬の翌日女性と海水浴を楽しみ、喜劇映画を見て一夜をともにしたことが、のちに裁判で彼を死刑に導く大きな要因となっていくが、これらの行為は、彼の自らの身体的欲求に対する忠実さを表わしているに過ぎない。彼は、「カフェオーレが大好きだから」(p.144) 飲み、煙草に関しては、一瞬躊躇うも「そんなことは全くたいしたことではない」(p.145) と判断して吸うのである。

ムルソーが全身で快樂を味わうのは、恋人マリーとの海水浴の場面である。全部で三度描かれるその場面では、口づけをかわしたり、足と足を絡ませたりする二人の接触が、水と光の戯れの中で官能的に描かれる。たとえば、次の二つの描写は、海水浴でのゆるやかな至福の時間の流れを感じさせるものだ。「僕はうなじの下で、マリーのお腹が静かに波打つを感じた。僕たちは、半ば眠ったように、ブイの上に長いことじっとしていた」(p.151)。「沖に出て、僕たちは浮き身をした。顔を空へ向けていると、僕の口もとまで流れてくる、水のヴェールを、太陽がはらいのけてくれるようだった」(p.170)。

しかし、マリーの母性すら感じさせる海水浴での穏やかな時間に対して、より「現在時」を貪欲に生きるムルソーの姿を表すのは、友人エマニュエルとどちらが

7) *ŒC*, I, p.304.

8) 松本陽正氏も、両者の照応を指摘し、『異邦人』と『シーシュポスの神話』における「運命」という語には、古代神話的なそれとは微妙に異なる、「偶然」の集積としてのニュアンスが備わっていることを的確に述べている。松本陽正『「異邦人」における太陽の image』『広島女学院大学論集』通巻 35 集、1985 年、242-243 頁。

9) ムルソーは最終場面で、次のように述べる。「[...] 僕はこれまで幸福だったし、今でもなおそうだと感じた」(p.213)。「シーシュポスの神話」は、「今やシーシュポスは幸福なのだと思わねばならぬ」(p.304) という言葉で締めくくられている。

10) ムルソーのこの性向については、次の文献も参照されたい。野崎敏『カミュ『よその』きみの友だち』みすず書房、〈理想の教室〉、2006 年、55-57 頁。

トラックに早く飛び乗るかを競う、次の場面ではなかろうか¹¹⁾。

事務所は海に面しており、僕らは、太陽に燃え上がる港の中の貨物船を眺めて一瞬ぼんやりした。この時一台のトラックが鎖の音と爆音けたたましくやってきた。エマニュエルが「やるか？」ときいた。僕は走り出した。トラックは僕らを追い越し、僕らはそれを追って突進した。僕は騒音と埃につつまれた。もはや何一つ見えず、ウインチや機械、水平線に踊る帆柱や僕らが沿って走った船体のさなかに、あの猛烈な疾走の衝動しか感じなかった。まず僕がつかまり、荷台に飛び上がった。それから、エマニュエルが腰掛けるのを手伝った。僕らは息を切らしていた。トラックは塵と太陽とに包まれ、波止場の不揃いな敷石の上で跳ね上がった。エマニュエルは息がとまるほど笑った。

僕らは汗びっしょりでセレストのところに着いた。 (p.155)

この一節で印象的なのは、暑さと爆音の中、ただひらすら疾走する「肉体」と化した(彼には埃と速さとで何も見えていない) ムルソーの姿である。若さ溢れる力強い肉体を、今この瞬間、存分に享受しようとする彼の姿が、この短い一節の中に、喜びと躍動感をもって描き出されている(トラックに「飛び乗る sauter」ムルソーと、敷石の上を「跳ね上がる sauter」トラックが呼応している)。また、「騒音と埃につつまれた」の「つつまれた noyé」と「汗びっしょりで en nage」には、ムルソーが愛してやまない海水浴へのアリュージョンも見られる。

このトラックのエピソードに示される、ほとんど動物的とも言える感覚は、よく眠るということ(埋葬のあとも、「横になって12時間眠ろうと考えた」とある、p.150 参照)、匂いに敏感であることにも表れている。私たちが知る限り、匂いの対象は次のように多様である:「ガソリン」(p.142)、「夜と花」(p.145)、「塩」(p.147, p.152, p.212)、「新鮮な大地」(p.147)、「車の皮と馬糞」(p.150)、「ニス」(id.)、「香」(id.)、「夏の夕べ」(p.197)、「夏」(p.202)、「大地」(p.212)、「夜」(p.212)。

しかしながら、これらの事実が示す、五感の鋭さは、こと太陽に関してムルソーにとっては致命的となる。「埋葬」、「殺人」、「裁判」の全ての場面において——それぞれ、母親、アラブ人、ムルソーの三人の死にかかわる——、アルジェの夏の太陽とその暑さはムルソーの判断力を奪う¹²⁾。特に「殺人」の場面では、「ママンを埋葬した日と同じ太陽」(p.175)が烈火のごとく降り注ぎ、頬は焼けるように熱く、血管が脈打ち、額では「太陽のシンバル」(id.)が額で鳴り響く。光はアラ

11) 善本孝氏は、以下に挙げる文献で、この場面を詳しく分析している。善本孝「ムルソーとエマニュエル——『異邦人』のトラックのエピソードを読み解く——」『言語・文学研究論集』白百合女子大学言語・文学研究センター、第9号、2009年、41-53頁。

12) ロラン・バルトは、この三つの場面における太陽のイメージ分析を行っている。Roland Barthes, «L'Étranger, roman solaire», in *Œuvres complètes*, tome I (1942-1965), édition établie et présentée par Éric Marty, Seuil, 1993, pp.398-400.

ブ人のナイフの刃に反射し、「きらめく長い刃」(id.)や「輝く剣」(p.176)となってムルソーの額に迫り、目をえぐる。「沸きたつ金属のような海」(p.175)の息吹と火の雨を降らすかのような空の下で、ムルソーは手をひきつらせ、発砲する。殺人は「太陽のせい」(p.201)という主人公の言葉は、読者にとっては説得力をもって響く。

この小説の語り手は、冒頭部からその特徴を露わにしているように、一人称で語るにもかかわらず、内面を明らかにしない。彼が母親の死を悲しんでいるのか、法廷の人物がいぶかしく思うように、読者もまたそれを知ることができない。しかし、語り手の心理や感情は不透明であるとしても、知覚に関してはそうではない(ジェラルド・ジュネットも、「外的焦点化を伴った等質物語世界的な語り」にこの作品を分類するにあたり、「知覚」については留保を示している¹³⁾)。それどころか、むしろ、ムルソーは五感から得る喜びに関して、次のいくつかの例が示すように、率直に語っている。「[カフェオーレは]とてもおいしかった」(p.147)、「夏の夜気が僕らの褐色の体の上を流れてゆく——その感じは心地よかった」(p.161)、「水は冷たく、泳いでいて気持ちがよかった」(p.170)。他人が彼を見るように語るムルソーの内面は、読者には、わからない。しかし、彼の知覚や感覚は真実らしさをもって伝わってくる。ムルソーにとっての現在時と結び付く、身体感覚がリアルに、鮮明に伝わってくると言えるだろう。

これまで、主に、ムルソーが逮捕前、自由な生活を謳歌していた第一部を分析の対象として、現在時に生きるムルソーが、どのような文学的效果によって浮かび上がるのかを概観してきた。第一部の日記風の語り——一日ないし二日の間隔で進められる語り——は、そのようなムルソーの時間意識を反映している。しかし、第二部になると、「逮捕後すぐに、僕は何度も尋問された」(p.177)という冒頭の文章から、第一部の冒頭の「きょう」とは様相を異にすることが明らかである。第二部に入って、ムルソーの時間観念はどのように変化するのか。

II. 回想するムルソー

1) 牢獄の中のムルソー

第二部第一章と第二章は、ともに「11カ月」(p.182)にわたる予審期間にあてられており、前者では予審、後者では牢獄での生活が回想風に語られている。つまり、同じ期間の別々の出来事が語られており、すでに第一部の、時間の推移を追った語り が崩壊していることがわかる。また、第二章は、「決して語りたくなかった事柄もある」(p.182)と始まっており、語り手の判断に基づいて語り がなされていることが明確に伝わる。ピエール＝ジョルジュ・カステックスが的確に指摘するように、これらの二つの章では、「総合的なヴィジョンが、断片的な描写にとって代わっている¹⁴⁾」のである。ムルソーの時間観念の変化を知る上で興味深

13) Gérard Genette, *Nouveau discours du récit*, Seuil, «Poétique», 1983, p.84 : «Le mode narratif de *L'Étranger* est «objectif» sur le plan «psychique», en ce sens que le héros-narrateur ne fait pas état de ses (éventuelles) pensées ; il ne l'est pas sur le plan perceptif [...]».

14) Pierre-Georges Castex, *Albert Camus et «L'Étranger»*, José Corti, [1965], 1986, p.109.

いのは、彼の牢獄での生活が綴られる第二部第二章である。はじめ、「自由人の考え」(p.185)から解放されないムルソーは、身体的な欲求が満足されないことに苛まれる。たとえば、海に出たいという欲望に捕われ、「足の裏の磯波、水に体を浸す感触、水の中での解放感を想像する」(id.)。また、女性に対する欲望で苦しみ、次のように述べる。「しかし、僕はしきりに、一人の女を、女たちを、また、僕の知ったあらゆる女たちを、彼女らを愛したあらゆる状況を思ったため、僕の独房は、女たちの顔に満ち、僕の欲情で一杯になった」(pp.185-186)。ここに挙げた二つの例で注目したいのは、ムルソーが、身体的な欲望からにせよ、それまであたりまえのように享受してきた快樂を「想像し」、思い起こそうとしている点である。「時を殺す」ことが問題となる牢獄で、ムルソーはしだいに、思い出すという行為に対してより自覚的になり、「思い出すことを覚えた瞬間から、全く退屈しなくなった」(p.186)と語る。実際、彼は、住んでいた部屋を想像の中で一周し、そこにあるものをできる限り詳細に、家具の中にある物の「全ての細部、象嵌やひび割れ、縁の欠けたところといった細部自体については、その色や肌理」(id.)に至るまで思い出すようになる。

その結果、数週間も経つと、自分の部屋にあったものを数え上げるだけで何時間も過ごすことができた。こうして、考えれば考えるほど、無視していたり、忘れてしまっていたりしたものを、あとからあとから、記憶から引きだしてきた。このとき僕は、たった一日だけしか生活しなかった人間でも、優に百年は牢獄で生きていける、ということがわかった。その人は、退屈しないで済むだけの、思い出を蓄えているだろう。(pp.186-187)

ムルソーが、彼の部屋以外に、意識的に「記憶から引きだした」ものはあったのだろうか。とりわけ、彼自身の過去の行為に関してはどうか、テキストには示されていない。しかし、ムルソーが視線を過去に向け、記憶からできる限り多くのものを汲み取ろうと執拗な努力をしていることは、彼ののちの語りの行為、回顧的視点からの語りの行為を説明する決定的な鍵を握っている。その点に関して、三野博司氏は次のように的確に指摘している。

十一月のムルソーの牢獄生活は、彼に時間意識についての変革をもたらし、それまで過去に無関心であったムルソーが、ここで記憶の価値を発見するのである。記憶とは語り行為にとって重要なものであるから、このこともまた、やがて語り手ムルソーの誕生をうながす要因となるだろう¹⁵⁾。

実際、牢獄での思い出すという行為が、語るという行為を導いたかのように、寡黙であったムルソーは、ある日、無意識のうちに発していた自己の声を聞き、ずっ

15) 三野博司『カミュ「異邦人」を読む——その謎と魅力——』彩流社、2002年、97-98頁。

と独り言を言っていたことに気付かされるのである¹⁶⁾。

2) 日記風の語りは偽りか？

こうして、日記風の語りから回想風の語りへの変化には、牢獄での「思い出す」という行為が関わっていることが確認されたが、しかし、ムルソーは実のところ、いつ彼の物語を語っているのだろうか。確かに、第一部は、「きょう」「昨日」「明後日」といった語とともに、時間の推移を追って語りがなされているが、実は、語り手は死刑判決を受けたのち、独房で、日記体を装って、自由な生活を送っていた日々を回想して書いたのではないか、という仮説を立てることもできる。ムルソーがいつ語っているのか、「日記か小説（自伝）か」という問題は、これまでの研究史で大きな議論を巻き起こしてきた。それについては、ベルナル・パンゴーらが詳しく解説している¹⁷⁾。ここでは、最後に、第一部において、第二部と同様、語り手が一定の時間を経て語っていると思わせる箇所をいくつか指摘するにとどめたい。

第一部第一章の最後の段落は、埋葬当日の夜、もしくは翌日の朝に語られたはずである。しかし、語り手は埋葬を振り返り、「それからあとは、全てごく迅速に、確実に、自然に事が運んだので、もはや何も覚えていない」(p.150)、「ほかにもまだいくつかこの日の印象は残っている」(*id.*)と語る。これらの言葉は、ある程度の時間を経て語られている印象を与える¹⁸⁾。それは、同じ章にある、次の文についても言える。「彼らのまん中に横たわるこの死者は、彼らの眼には何ものをも意味しないのではないか、という気すらした。だが、これは間違った印象だった、と今では思う」(p.146)¹⁹⁾。

そして、内容上、のちに展開する第二部との照応が見出せるのは、語り手が通夜の弔問客を前にした、次の印象である。

彼らが私を裁くためにそこにいるのだ、というばかげた印象が、一瞬、私を捕えた。
(p.145)

その一方で、裁判の場面では、陪審員の席が「トラムの座席」に二度たとえられている (p.189 及び p.192 参照)。日常生活と裁判が、反転しようということを鏡

16) 「[...] この数カ月来初めてのことだったが、僕は自分の声音をはっきりと聞いた。僕はそれがもう幾日も長いこと僕の耳に響いている声だと聞き分け、その間ずっと、僕が独り言を言っていたのを了解した」(p.188)。

17) 次の文献を参照のこと。Bernard Pingaud, *L'Étranger d'Albert Camus*, Gallimard, « foliothèque », 1992, pp.83-88. 三野、前掲書、168-177 頁。

18) 通夜の描写にも、「それ以後のことは、もうわからない。夜が更けた。覚えているのは [...]」(p.146) とある。しかしながら、本文で言及した箇所を含めて、忘却は、時の経過によるものか、母親の死によって受けた動揺によるものか、微妙なところがある。

19) 時を隔てた過去の印象や行為に対する注釈は、第一部第五章にある、サラマン老人との会話の中にも見受けられる。「僕は、いまだになぜだかわからないが、こう答えた」(p.167)。付言すれば、よく指摘されるように、第一部第四章で、「今朝」と語られる一日の出来事の終わりに、「明日 *demain*」と記すべきところ、「翌日 *le lendemain*」となっている箇所がある (p.164 参照)。

のように示しているが、この照応は、作家の意図によるものであれ、語り手に視点を移せば、彼がすでに裁判を経験したから書きうることだと考えることも可能である。語りの時点が、物語の最後にあると考えれば、裁判で問題となる、カフェオーレ、煙草といった些事が全て第一部で語られているのは偶然ではない。語り手が「母親の死」から語るのは、自らの死刑を招いたそもそもの出発点だからであり、全ては、彼が自らの潔白を、正当性を証明するという方向に従っている、ということになる。この考え方に立つイザベル・アンセルは、「[...] 無垢なムルソーの物語は、無垢ではないのだ...²⁰⁾」と述べる。

日記体が、擬装されたものか否か、どちらにしても、テキスト上、矛盾が生じるので、決して解決をみない問題である。しかし、物事が全て終わってから語り がなされたという視点に立つブライアン・T・フィッチと M.G. バリエが、第一部の語りに、前者は「出来事を生き直すために昔の自分に戻ろうとする語り手の精神的努力²¹⁾」の表れを、後者はこの意見に読者の視点から修正を加え、ムルソーは、出来事を「生き直す」のではなく、「生きている」というべきだと述べていることは興味深い²²⁾。両者の見解は、回想する語り手が、「きょう」と語る瞬間から、過去の自己を（再）体験しているという意味では軌を一にしている²³⁾。その限りにおいて、第一部の語りは、物語の最終地点から回想されたものであっても、そこに描かれる、現在時に生きるムルソーの姿をなんら損なうものではない。

結び

本論では、物語の第一部と第二部の語りの変化に着目し、現在という瞬間を汲み尽くし、享受するムルソーと、回想するムルソーという、二つの側面に焦点を当てた。しかし、両者の境界線は、言うまでもなく、第一部と第二部の間に存在するのではない。第一部は、日の推移を追った語りであるが、主要時制は複合過去形であり、回顧的視点からの叙述であることには変わりがない。また、第一部が、実は死刑囚となったムルソーによって語られているという解釈もできることはすでに述べたとおりである。さらに付け加えれば、両者の境界線を、主人公と語り手の区別に求めるべきでもない。一人称体の複合過去形による語りは、主人公と語り手の区別を曖昧にする。ただ一つ、確かなことは、この物語が、回顧的視点に支えられながらも、カミュの巧妙な技法によって、現在時に生きる人物を

20) Isabelle Ansel, *L'Étranger de Camus*, Éditions Pédagogie moderne, «Lectoguide seconde cycle», 1981, p.57.

21) Brian T. Fitch, *Narrateur et narration dans L'Étranger d'Albert Camus*, Lettres modernes, 1968, p.25.

22) M.G. Barrier, *L'Art du récit dans L'Étranger d'Albert Camus*, A.G.Nizet, 1966, p.26.

23) 東浦弘樹氏は、「第一部の語り、結末の「すべてを生き直そう」というムルソーの決意と密接に結びついている」ことが「重要」であり、それゆえ、「『異邦人』第一部での語り」と出来事との同時性は、過ぎ去った過去をあたかも現在のものであるかのように追体験しようとするムルソーの努力のあらわれと考えることができ「る」と的確に述べている。東浦弘樹『晴れた日には『異邦人』を読もう——アルベール・カミュと「やさしい無関心」』世界思想社、2010年、32頁。

生き生きと描き出している、ということである²⁴⁾。そこにこの小説の面白みがある。

とりわけ、現在時に対するムルソーの意識を強く印象づけるのは、第二部最終章の、司祭に対する反抗の場面である。そこでムルソーは、悔悛を説く司祭に怒りを爆発させ、あの世という不確かな未来を断固として拒否する。そこに読みとれる、この世である地上の幸福に対する激しい執着には、「今この時、僕の王国は全てこの世にある²⁵⁾」と語ったカミュのそれとの呼応を見出せる。カミュは実際、その著作においても、政治的・社会的発言においても、常に現在の人間の肉体と幸福を最優先する姿勢を持ち続けた。アンヌ・プルトーは、『異邦人』に、「直接的な経験を可能な限り反映しうる、生のエクリチュール *une écriture de vivre*²⁶⁾」を見ている。生の躍動を伝える、まさしく「生のエクリチュール」と言うべき『異邦人』は、現在時に対するカミュの感性を文学的に鮮やかな形で昇華しているという意味で、この作家の著作の中でもひと際輝きを放っていると言えるだろう。

(高知大学非常勤講師)

24) この点に関しては、以下の論文を参照されたい。Tomoko Ando, «Le Paradoxe de la narration dans *L'Étranger* — une comparaison avec *La Nausée*», in *Études camusiennes*, n°9, Kyoto, Seizansha, 2010, pp.53-66.

25) Albert Camus, *L'Envers et l'Endroit*, in *ŒC*, I, p.71.

26) Anne Prouteau, *Albert Camus ou le présent impérissable*, Orizons, «Universités / Domaine littéraire», 2008, p.126.